

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 13 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520601

研究課題名（和文）

中国語コミュニケーション文法およびその導入のための教材・教授法の構築

研究課題名（英文）

Study in Communicative Grammar of Chinese and its application to Teaching Chinese as a Second Language

研究代表者

山崎 直樹（ YAMAZAKI NAOKI ）

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：30230402

研究成果の概要（和文）：

コミュニケーション的な中国語の能力を身につけるためには、どのような知識・スキルを身につけるべきかを、社会言語学、語用論、機能言語学、中間言語研究、異文化コミュニケーションなどの観点から具体的に指摘し、現在の中国語教育で取りあげられている学習項目は、それらのうちの重要な点ですらカバーできていないことを指摘した。そして、それらの指摘を教授法の構築や教材の開発に生かす道筋を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This research team analyzes what kind of knowledge and skills are required for developing communicative competence in Chinese as a second language, in the various fields such as sociolinguistics, pragmatics, functional linguistics, interlanguage studies and cross-cultural communication, and obtains perspective on establishment of teaching methods and on development of teaching materials in communicative Chinese language teaching.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：教授法・カリキュラム論

1. 研究開始当初の背景

当研究課題のメンバーは、それぞれが、当時の中国語教育で行われていた、さまざまな方法論には満足しておらず、自身の日々の研

鑽の成果を中国語教育の改善に向けてフィードバックする作業をしていたものの、それらは散発的な試みで、斯界全体の流れを変える動きにはなっていなかった。そこで、「コミュニケーション的な能力を育成する中国語教

育のための体系構築」を目指し、「中国語コミュニケーション文法の確立」の名のもとに、研究組織を作った。

2. 研究の目的

ここでいう「中国語コミュニケーション文法」とは、「コミュニケーション文法の確立」の名のもとに、研究組織を作った。

ここでいう「中国語コミュニケーション文法」とは、「コミュニケーション文法の確立」の名のもとに、研究組織を作った。

3. 研究の方法

(1) まず、コミュニケーション文法の確立」の名のもとに、研究組織を作った。

(2) 次に、メンバー全員の方向性にある程度の統一性が確認できた時点で、既存のごく一般的な教科書を使って、それぞれが主張する方法論を適用したばあい、どのような授業が設計でき、どのように教材が adaptation されうるかを検討した。さらに、全員に、同一の教科書の同一の個所を課題として与え、それが、それぞれのアプローチにより、どのように adaptation され、そしてそれによる授業設計がどのようになるかを検討した。

(3) 期間の前2年間における研究成果のうち、特に斯界の他の研究者・教育者と共有したいものを、メンバーがそれぞれ選択し、共有のための方途を探った。

4. 研究成果

前項の(1)の成果：植村は、コミュニケーション機能や表現意図を中心とした文型一覧表を作成すべく英語教育の成果なども取り入れ、試作を進めた。鈴木は、コミュニケーションゴールからのバックワードデザインという手法で授業をデザインした結果、文型の定着度にどのような改善が見られたかを、実地に検証した。中西は、文型の選択がもたらす表現意図の相違と学習者にとっての難易度（構造の複雑さ）および「より自然な表現」という観点から、複数の言語現象を分析した。西は、社会言語学的観点から、中

国語においてポライトネストラジェジーの選択が決定される尺度を、日本語のそれと対照し、その両者の間に明らかな違いのあることを明らかにする研究を行った。

年度末に、以上の成果をまとめて発表し、ディカッションを行う公開ワークショップを開催した。このワークショップ『コミュニケーションのための「文法」を考える』では、初級段階の学習者の言語体系に関する知識で、どこまで表現意図の違いやポライトネスの違いを表現することが可能か、両者に齟齬がある場合、どちらをどう優先すべきかなどについて、参会者も交えて討論を行なった。

このワークショップは多くの参加者を集め、当課題の研究者は、当課題が中国語教育関係者および中国語学関係者にとって重要な課題であることを再認識することができた。

前項の(2)の成果：当初の研究計画では、最終年度に、前2年間の研究成果を総合して、教育・教材への応用を試みる予定であった。しかし、研究組織内の検討により、「具体的な教材をイメージしたほうが基礎的な研究も進めやすい」という方向性が確認されたこと、また、初年度のワークショップの参会者から「教育の現場への応用例について具体的なプランを知りたい」という意見が多く寄せられたこともあり、期間2年目において、「日本の大学で広く使われている教科書」を素材にし、それを個々の授業の目的にどう適応させていくかというテーマ (Textbook adaptation) に取り組むこととなった。

そして、その取り組みの成果を、中国語教育学会公開ワークショップ「中国語教科書調理法——教科書を教材にするために」という催しで公表した。

ここでは、メンバーがそれぞれ、自己のアプローチの特徴を端的に提示できるように、自分で選択した市販の教科書を素材にした「自由研究」と、メンバー全員が、同じ教科書の同じ個所を素材にして、それぞれのアプローチの違いを明示する「課題研究」とを公表し、さらにポスターセッションの場を設け、参会者と時間をかけて議論をした。なお、当研究組織による公開ワークショップは、前年度は中国語教育学会関西地区研究会の一環として行なわれたが、その意義が学会に評価され、今年度は学会公認の全国規模の行事として開催することができた。

このワークショップの成果は、次の3つの認識を参会者と共有できたことである：(1)教科書に合わせて授業をするのではなく、授業の目的に合わせて教科書を作り替えるのが効果的な教授法である、(2)コミュニケーション能力の育成を目指す授業であっても、適切な目標設定とタスクの設定により、言語構造に関する知識をおろそかにせず済む、

(3)教師が適切な教材の準備と誘導を行なえば、学習者の自律的な学習を引き出すことが可能である。

前項の(3)の成果：『中国語教育の基盤の再設計にむけて』と題する公開ワークショップを行い(2013年3月9日、早稲田奉仕園)、メンバーのそれぞれが当課題の研究期間の成果の中でも、特に斯界と共有したい成果を選んで、トーク形式で発表と参加者との討論を行った。

発表題目は、「目標分解と学習要素設定のシステム—遠隔ゴールから直近ゴールへ」(山崎)、「ルーブリックによる評価の波及効果」(植村)、「テキスト・授業の中にいかに文化理解を盛り込むか」(中西)、「呼称からみた中国語コミュニケーション・ルール—「上下」・「親疎」のものさしをいかに使うか」(西)である。

また、メンバーだけでも会合をもち、当研究課題の成果を集成した企画中の図書『中国語教育の基盤の再設計』の内容について討論した。また、今後、この研究課題のもと、メンバーそれぞれがどのように研究を進めていくべきか、また、その成果を共有し斯界に広く問うための発表形式としてのセミナー開催について、意見を交換した。また、研究期間全体を通じての成果として、メンバーそれぞれがどのような分野で、コミュニケーション能力の育成を重視する中国語教育に貢献していけるのかという方向性が明らかになった。その方向とは、バックワードデザインによる教材設計のシステム化(山崎)、同デザインによる新しいタイプの授業・ルーブリックによるパフォーマンス評価の効果検証(植村)、レアリアを用いた文化理解授業の設計(中西)、同デザインの理論的妥当性と学習効果の検証(鈴木)、語用論的・社会言語学的視点による中国語教育の構想(西)、などである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 16 件)

(1)鈴木慶夏. 「從“運用”到“知識”的語法教学法—基于逆向設計的真實任務」, 華文教學叢書, 2013, (頁番号未定). 査読有.

(2)山崎直樹. 「中国語でクローズテストを作ってみる」, 漢字文献情報処理研究 13, 2012, pp.176-182. 査読有.

(3)西香織. 「美国漢語學習者的漢語感謝回應模式」, Canadian TCSL Journal, Vol.2, No.2, 2012, pp.90-95. 査読有.

(4)植村麻紀子. 「21世紀型スキルの養成と中国語教育—「つながる」をキーワードに」, 中国語教育 10号, 2012, pp.105-125. 査読有.

(5)中西千香. 「機能からみた前置詞の再分類—実から虚へ—」, 愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)第43号, 2011, pp.313-332. 査読無.

[学会発表] (計 39 件)

(1)山崎直樹. 「入学者の言語的背景の多様化に大学は対応できるか:中国語のコースを例として」, 日本英語教育学会第43回年次研究集会(招待講演), 2013/03/17, 早稲田大学.

(2)植村麻紀子. 「CEFR と『外国語学習のめやす』—言語共通参照枠の「何」を「どのように」活用するか」, 語学教育エキスポ 2013, 2013/03/16, 早稲田大学.

(3)鈴木慶夏. 'The Interlanguage Production of "Women qu qidian ba" By Japanese-Speaking L2 Chinese Learners: Pedagogical and Theoretical Implication,' The 2nd International Conference on Chinese as a Second Language Research, 2012/08/18, 臺灣師範大學(中華民國・台湾)

(4)西香織. 「日本人中国語学習者の感謝に対する応答—中間言語語用論的角度から—」, 中国語教育学会 10 周年・高等学校中国語教育研究会 30 周年記念合同大会, 2012/06/03, 神田外語大学

(5)中西千香. 「前置詞フレーズが二つならぶとき」, 日本中国語学会第 61 回全国大会, 2011/10/30, 松山大学

[図書] (計 2 件)

(1)中西千香. 『Eメールの中国語』白水社, 2012, (総頁: 221) .

(2)小溪教材研究チーム編(植村麻紀子共同執筆), 『高校生からの中国語 2』白帝社, 2011, (総頁: 117)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

『中国語コミュニケーション文法を考える』

<http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~ymzknk/kome/index.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

山崎 直樹(YAMAZAKI NAOKI)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：30230402

(2)研究分担者

中西 千香(NAKANISHI CHIKA)

愛知県立大学・外国語学部・准教授

研究者番号：50548592

西 香織(NISHI KAORI)

北九州市立大学・外国語学部・准教授

研究者番号：70390367

植村 麻紀子(UEMURA MAKIKO)

神田外語大学・外国語学部・講師

研究者番号：70512383

鈴木 慶夏(SUZUKI KEIKA)

釧路公立大学・経済学部・准教授

研究者番号：80404797